

学生主体イベントにおける責任と信頼の再構築

西田 怜生*1

指導教員：久保 圭司*2・白石 利夫*2・三岡 恵子*2・ドゥラゴ 英理花*2

Email: toshio_shiraishi@shotoku.ed.jp

*1:聖徳学園高等学校2年

*2:聖徳学園中学・高等学校

◎Key Words 学生, イベント運営, 責任

1. はじめに

現代社会では、探究学習の推進などにみられるように、学生が企画・運営の担い手として活躍する機会が増加している。しかし、現場では、学生を経験不足や責任能力が未発達であるとする「未熟」という先入観が根強く、結果として「学生だから責任は取れない」「決定権はない」といった扱いに繋がり、彼らの主体性や貢献が十分に評価されない構造的課題が存在する。筆者が主催したTarareBAの事例は、本考察を実証するものである。TarareBAは「学生×地方創生×海外進出」をテーマとした次世代共創型イベントだった。地域課題を起点に、学生・若手起業家・企業担当者が集い、地域資源の可能性とグローバル展開の方法について探究・提案した。イベントでは、登壇者によるビジネスアイデアの発表や、参加者間のネットワーク交流などを実施し、一部の学生は登壇者として発表にも参加した。学生は単なる運営補助ではなく、企画立案から登壇者調整、広報設計、当日の進行まで主体的に関与した。特に、ポスターデザインやSNS発信など小さなタスクから任せることで、徐々に責任の範囲を広げていき、最終的には登壇運営や発表といった高裁量な領域までステップアップできた。この設計によって、学生が未定義であるがゆえに持つ柔軟性や創造性が発揮され、現場に新たな価値をもたらすことができた。

本研究は、従来の「学生＝未熟」という固定観念に対し、学生を「未定義の可能性を秘めた存在」と捉える新たな視点から、イベント運営における責任と信頼の設計を問い直すことを目的とする。アンケート調査を通じて学生の現場体験を把握し、世代を超えて納得できる共創の形を提案することで、学生の社会参画を促進し、ひいては地域社会や企業の持続的な発展に貢献することを目指す。

2. 調査概要

本研究では、イベントに関わった経験を持つ高校生、大学生、社会人を対象にオンラインアンケート調査を実施した。筆者自身が高校生であり、U-18世代の当事者としての視点が調査設計に反映されている。

2.1 調査目的

本研究では、学生を「未熟な存在」と見なす従来の視点ではなく、適切な責任や信頼の設計によって可能性を引き出される「未定義の可能性を秘めた存在」として捉える視点に立つ。その上で、イベント運営における学生の参加実態、意見の反映度、責任感、信頼感、モチベーションの現状を把握し、さらに学生の主体的な参画を阻害または促進する要因を明らかにすることで、信頼と責任に基づく協働的な関係性の構築に向けた実践的な示唆を得ることを目的とする。

2.2 調査対象と方法

- ・対象者: イベントに関わった経験のある高校生 (50%), 大学生 (30%), 社会人 (20%)
- ・有効回答数: 10件
- ・方法: オンラインアンケート調査

2.3 調査項目

以下の項目について回答を求めた。

- ・イベント参加形態、関わり方、意見を出す場の有無と反映度、責任感・信頼感の有無、モチベーション、役職の有無、関わった相手の属性
- ・自由記述によるイベント改善提案、主催者側からの「信頼できる学生」の特徴や「責任ある立場を任せる際に重視すること」に関する意見

3. 結果

アンケート結果の主要な分析結果を以下に示す(詳細は各図を参照)。

3.1 学生のイベント参画実態

回答者の80%が学校内小規模イベントに参加経験がある一方で、地域イベントに30%、企業・団体が関与するイベントに40%が参画していた。関わり方としては、企画段階から関わる学生が60%と過半数を占めるものの、当日のみの関与も30%存在した（図1参照）。このように、学生の活動範囲は多様である一方で、その関与の深さにはばらつきが見られた。

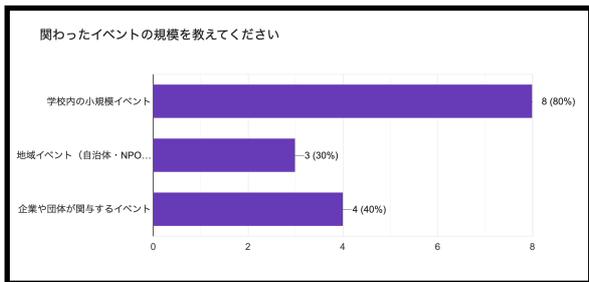


図1. イベント参加形態と関わり方

3.2 学生の意見反映と主体性に関する課題

意見を出す場が「あった」と回答した学生は30%、「多少あった」も30%であった。一方、「全くなかった」と「ほとんどなかった」を合わせると40%に上った（図2参照）。さらに、実際に意見が「よく反映された」と感じた学生は20%に留まり、「全く反映されなかった」と回答した学生は50%であった（図3参照）。また、「責任ある立場にいた」と強く感じた学生は30%に過ぎず、「全く感じなかった」が40%であった（図4参照）。同様に、「信頼されている」と強く感じた学生はわずか10%であり、「全く感じなかった」と回答した学生は50%であった（図5参照）。自由記述からは、「高校生という肩書きが無ければもっと自由に発言できていた」といった、立場に起因する主体性阻害の示唆が得られた。

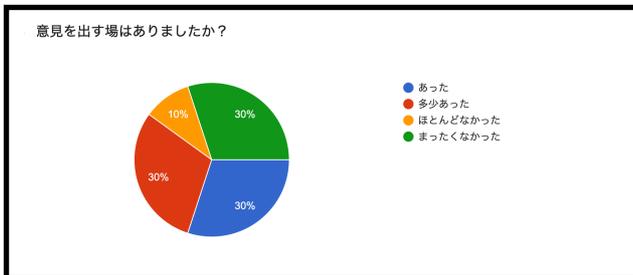


図2. 学生の意見を出す場

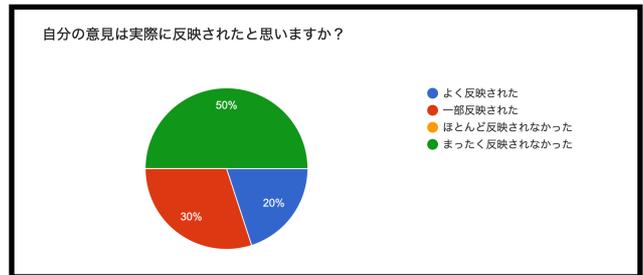


図3. 学生の意見反映度

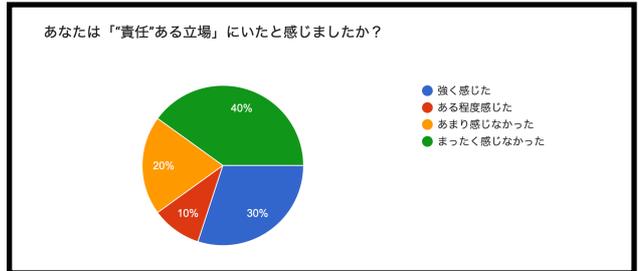


図4. 責任感の有無

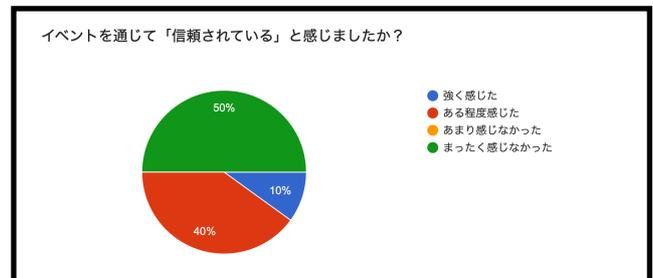


図5. 信頼されていると感じたか

3.3 モチベーションと役職の現状

モチベーションや当事者意識については、「強く持てた」学生が40%であった一方で、「全く持てなかった」学生も40%と、二極化の傾向が明らかになった（図6参照）。肩書きがあった人は60%であった（図7参照）。

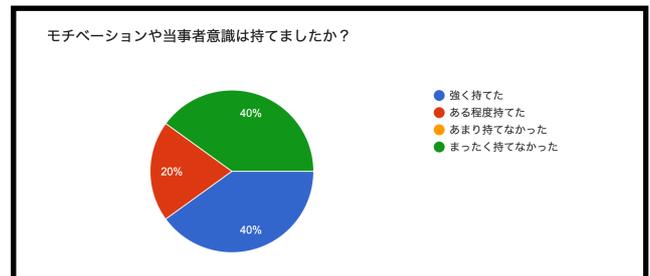


図6. モチベーションの有無

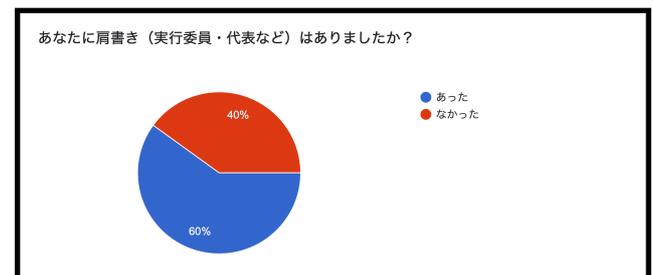


図7. 役職の有無

3.4 主催者側から見た学生への信頼と期待

イベント主催経験のある人からは、学生を信頼する上で「周囲の話をよく聞いていたとき（60%）」、「提案と行動がセットになっていたとき（80%）」、および「事後報告や振り返りが丁寧だとき（80%）」が特に重視されることが明らかになった（図8参照）。また、学生に責任ある立場を任せる際には、「主体性（40%）」や「事前の信頼関係（40%）」が同率で最も重視されており、これらの要素が学生の能力を年齢や経験によらず評価する上で不可欠であることが示唆された（図9参照）。具体的なコメントとして、「自主的な進捗共有」や「行動に対する客観的な振り返りと次への活かし方」を明示できる学生が高い信頼を得ていた。

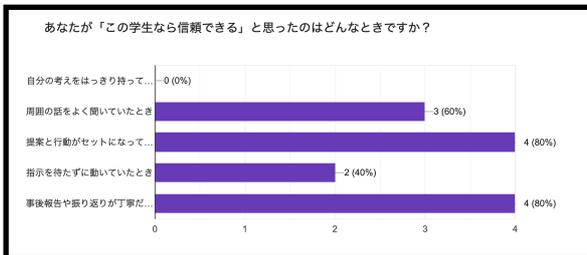


図8. 主催者側が信頼できる学生の特徴

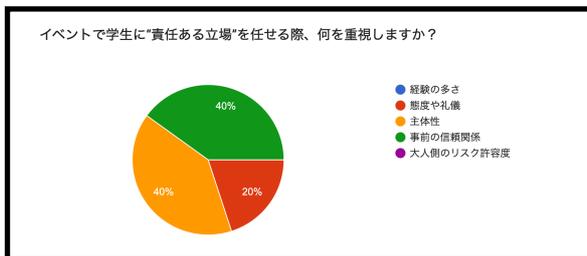


図9. 主催者側が学生に重視すること

4. 考察

アンケート結果（図2, 3, 4, 5）は、学生が主体的に意見を出し、責任を担うことへの意欲があるにもかかわらず、その機会が十分に提供されていない、あるいは適切に評価されていない可能性を示している。学生が責任を引き受けて成長したい意欲があるにもかかわらず、既存の役割設計や大人側の固定観念により主体性が活かされていない現状を明確にした。特に「学生という肩書き」が阻害要因となる点は、年齢や立場による構造的問題を示唆する。このような状況は、学生の成長機会を奪い、結果としてイベント運営に対する彼らのモチベーションを「強く持てた」群と「全く持てなかった」群に二極化させていると考えられる。これは、肩書きがあった人が60%であったにもかかわらず

らず、それが責任感や信頼感に直結していない現状とも符合する（図7参照）。

一方、主催者側の意見は、学生への信頼が「年齢や経験」ではなく「行動と情報共有の質」によって築かれることを示した。特に「自主的な進捗共有」や「客観的な振り返りと次への活かし方」を明示できる学生は、大人のアドバイスを引き出し、自身の成長を加速させる可能性を秘めていると言えるだろう。

筆者が主催したTarareBAの事例は、この考察を実証するものである。TarareBAは「学生×地方創生×海外進出」をテーマに据え、地域の資源や課題を基に学生が社会人や若手起業家とともに次世代のビジネスを共創するイベントである。この場において学生は、提案者・運営者として議論や企画を主導しながら、地域や企業から信頼を獲得し、責任ある役割を担っていった。たとえば、ポスターデザインやSNS発信など小さなタスクから始め、最終的には登壇や進行管理まで担当するなど、段階的な役割拡大を実現できた。それにより、学生の「未定義」な立場を活かした柔軟な発想と行動力が、現場に新たな視点と価値をもたらした。これは、Lave & Wengerの「状況的学習論」における「正統的周辺参加⁽¹⁾」の考え方、すなわち、小さな役割から徐々に責任を拡大していくプロセスが、学習者の成長とコミュニティへの統合を効果的に促すという理論を裏付けている。適切な責任範囲の明確化と段階的なステップアップは、学生の「未定義」な可能性を「定義」し、実践を通して成長させる有効なアプローチである。

結論として、アンケート結果とTarareBAの事例は、学生は「未熟」なのではなく、適切な「責任と信頼の設計」、そして「大人側のリスク許容とサポート」によって、その「未定義」な可能性を最大限に開花させることができるという本研究の主張を強く支持している。

なお、筆者が所属する中高校一貫校の生徒会活動においては、学生が議案の作成・提出、会議の運営、予算管理、さらには文化祭や卒業生送別会など、各種イベントの企画・実行に至るまで広範な裁量と責任を担っている。このような生徒会の活動は、制度上「学生主体」であることが明確化されているため、イベントや政策立案において学生の意見が制度的に位置づけられており、一定の正当性と権限が担保されている点で特徴的である。一方で、実際の運営においては、教職員による最終決裁や事前確認が必要な場面も多く、形式的な裁量の裏で「学校の意向」や「先生の許可」を前提とした行

動が求められるケースも少なくない。特に卒業送別会の企画においては、筆者が「生徒主導で進めたい」と提案したアイデアが、教員側のリスク回避や前例主義を理由に却下された経験がある。対話を重ねた結果、一部実現に至ったが、そこには「責任を取るのは誰か」という前提が常に立ちはだかっていた。

このように、生徒会は「責任を持つ前提で設計された学生組織」であるにもかかわらず、学校という構造の中では、責任と裁量が必ずしも一致しておらず、「主体性を発揮したい学生」と「リスクを避けたい大人」との間に温度差が生じることがある。地域・企業イベントにおいては、学生が責任ある行動をしても制度上の設計が伴わないために評価されにくいという課題があるが、生徒会のような制度内活動でも「制度がある＝裁量がある」とは限らないことがこの経験から明らかになった。

TarareBAのような制度外のイベントであっても小さな役割から段階的に信頼と責任を積み重ねることで、実質的なリーダーシップを発揮できるように設計を行うことは可能である。生徒会とイベント、両者の比較から、学生の立場に応じた柔軟かつ実効性ある責任設計が必要であることが浮き彫りとなった。

5. 改善提案

学生の潜在能力を最大限に引き出すため、以下の提案を行う。

5.1 参画機会の創出と意見反映の仕組み化

- ・企画初期段階からの学生意見の取り入れ（例：アンケートやワークショップを活用し、学生が本当に求めている内容を収集）
- ・体験型コンテンツの強化による学生の能動的な関与促進（例：単なる発表だけでなく、学生自身が手を動かすワークショップやスタンプレリーなどを導入）

5.2 コミュニケーションと情報共有の最適化

- ・SNS等多様なチャンネルでの進捗・情報共有の徹底（例：Googleカレンダーや共有シートを活用し誰が何をいつまでにするかなどの明確化）
- ・広報・告知の早期化と多様な形式での発信
- ・IT・オンライン活用による情報アクセシビリティと参加者のエンゲージメント向上

5.3 役割設計と成長支援の具体化

- ・役割分担とスケジュールの明確化・可視化
- ・イベント後の振り返り会議とナレッジ共有による組織的学習の促進（例：アンケートで「良かった点」「改善すべき点」を回収し、次回以降の

資源として活用）

6. おわりに

本研究は、学生が「未熟」ではなく「未定義」であり、責任と信頼の設計次第で企業・地域社会の共創の担い手として十分に活躍できることを明らかにした。アンケート調査と筆者の経験、特に筆者が主催したTarareBAにおいて、学生個人が小さな役割から成功体験を積み、イベントの主体的な運営を可能にした事例から、学生の主体性を引き出すためには、企画初期段階からの学生の意見を取り入れ、小さな責任の段階的引き上げ、そして大人と学生が責任を共有する文化の普及が不可欠である。本研究が提案する共創型イベントモデルは、学生のエンパワーメントを促進し、世代を超えた連携を深める新たな可能性を示している。

謝辞

本研究を進めるにあたり、貴重なご意見やご協力をいただいたTarareBAの関係者の方々、ならびにアンケートにご協力くださった学生、社会人、およびイベント主催者の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- (1) Lave J. & Wenger E.: “Situated learning: Legitimate peripheral participation”, Cambridge university press (1991).
- (2) 文部科学省: “高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編”, 東山書房 (2018).
- (3) 山崎 亮: “コミュニティデザインの時代: 「まち」の課題を住民と解決する”, 英治出版 (2012).